

僕の帽子のお話

有島武郎

青空文庫

「僕の帽子はおとうさんが東京から買って来て下さったのです。ねだんは二円八十銭^{せん}で、かつこうもいいし、らしやも上等です。おとうさんが大切にしなければいけないと仰^{おつしや}有いました。僕もその帽子が好きだから大切にしています。夜は寝る時にも手に持つて寝ます」

綴^{つづ}り方の時にこういう作文を出したら、先生が皆んなにそれを読んで聞かせて、「寝る時にも手に持つて寝ます。寝る時にも手に持つて寝ます」と二度そのところを繰^{くり}返^{かえ}してわははとお笑いにになりました。皆んなも、先生が大きな口を開^あいてお笑いになるのを見ると、一緒になって笑いました。僕もおかしくなつて笑

いました。そうしたら皆んながなのこと笑いました。

その大切な帽子がなくなってしまったのですから僕は本当に困りました。いつもの通り「御機嫌ようごきげん」をして、本の包みを枕まくらもとにおいて、帽子のぴかぴか光る底ひさしをつまんで寝たことだけはちゃんと覚えているのですが、それがどこへか見えなくなつたのです。

眼めをさましたら本の包つつみはちゃんと枕もとにありましたけれども、帽子はありませんでした。僕は驚いて、半分寢床から起き上つて、あつちこつちを見廻みまわしました。おとうさんもおかあさんも、何なんにも知らないように、僕のそばでよく寝ていらつしやいます。僕はおかあさんおこを起おこそうかとちよつと思いましたが、おかあさんが

「お前さんお寝ぼけね、ここにちやあんとあるじやありませんか」といいながら、わけなく見付けだしでもなさると、少し耻しいと思つて、起すのをやめて、かいまきの袖をまくり上げたり、枕の近所を探して見たりしたけれども、やっぱりありません。よく探して見たら直ぐ出て来るだろうと初めの中は思つて、それほど心配はしなかつたけれども、いくらそこいらを探しても、どうしても出て来ようとはしないので、だんだん心配になつて来て、しまいは喉が干からびるほど心配になつてしまいました。寢床の裾の方まぐつて見ました。もしや手に持ったままで帽子のありかを探しているのではないかと思つて、両手を眼の前につき出して、手の平と手の甲と、指の間とをよく調べても見ました。ありませ

ん。僕は胸がどきどきして来ました。

昨日きのう買っていたいた読本とくほんの字引きが一番大切で、その次ぎ

に大切なのは帽子なんだから、僕は悲しくなり出しました。涙が眼に一杯たまつて来ました。僕は「泣いたって駄目だよ」と涙を叱しかりつけながら、そつと寢床を抜け出して本棚の所に行つて上から下までよく見ましたけれども、帽子らしいものは見えません。僕は本当に困つてしまいました。

「帽子を持つて寝たのは一昨日おとといの晩で、昨夜はひよつとするとそうするのを忘れたのかも知れない」とふとその時思いました。そう思うと、持つて寝たようでもあり、持つのを忘れて寝たようでもあります。「きっと忘れたんだ。そんなら中なかの口くちにおき忘れて

あるんだ。そうだ」僕は飛び上がるほど嬉しくなりました。中の口の帽子かけに底のぴかぴか光った帽子が、知らん顔をしてぶら下がっているんだ。なんのこったと思うと、僕はひとりでに面白くなって、襖をがらつと勢よく開けましたが、その音におとうさんやおかあさんが眼をおさましになると大変だと思って、後ろをふり返って見ました。物音にすぐ眼のさめるおかあさんも、その時にはよく寝ていらつしやいました。僕はそうつと襖をしめて、中の口の方に行きました。いつでもその電燈は消してあるはずなのに、その晩ばかりは昼のように明るくなっていました。なんでもよく見えました。中の口の帽子かけには、おとうさんの帽子の隣りに、僕の帽子が威張りくさってかかっているに違いない

とは思いましたが、なんだかやはり心配で、僕はそこに行くまで、なるべくそっちの方を向きませんでした。そしてしつかりその前に来てから、「ばあ」をするように、急に上を向いて見ました。

おとうさんの茶色の帽子だけが知らん顔をしてかかっていました。あるに違いないと思っていた僕の帽子はやはりそこにもありませんでした。僕はせかせかした気持ちになって、あつちこちを見廻みまわしました。

そうしたら中の口の格子戸こうしどに黒いものが挟まっているのを見つけて出しました。電燈の光でよく見ると、驚いたことにはそれが僕の帽子らしいのです。僕は夢中になって、そこにあった草履ぞうりをひっかけて飛び出しました。そして格子戸を開けて、ひしやげた帽

子を拾おうとしたら、不思議にも格子戸がひとりでに音もなく開いて、帽子がひよいと往來おうらいの方へ転がり出だしました。格子戸のむこうには雨戸が締まっているはずなのに、今夜に限ってそれも開いていました。けれども僕はそんなことを考えてはいられませんでした。帽子がどこかに見えなくならない中うちにと思つて、慌あわてて僕も格子戸のあきまから駈かけ出しました。見ると帽子は投げられた円盤えんばんのように二、三間先げんきをくるくるとまわつて行ゆきます。風も吹いていないのに不思議なことでした。僕は何しろ一生懸命に駈け出して帽子に追いつきました。まあよかったと安心しながら、それを拾おうとすると、帽子は上手じょうずに僕の手からぬけ出して、ころころと二、三間先に転がって行くではありませんか。僕

は大急ぎで立ち上がってまたあとを追いかけてました。そんな風に
して、帽子は僕につかまりそうになると、二間転がり、三間転が
りして、どこまでも僕から逃げのびました。

四つ角よかどの学校の、道具を売っているおばさんの所まで来ると帽
子のやつ、そこに立ち止まって、独楽こまのように三、四遍横へんまわり
をしたかと思うと、調子をつけるつもりかちよつと飛び上がって、
地面に落ちるや否や学校の方を向いて驚くほど早く走りはじめま
した。見る見る歯医者うちの家の前を通り過ぎて、始終僕たちをから
かう小僧てんすいおけのいる酒屋の天水桶に飛び乗って、そこでまたきりき
り舞いをして桶のむこうに落ちたと思うと、今度は斜はすむこうの三
軒長屋げんながやの格子窓の中ほどの所を、風に吹きつけられたようにか

すめて通つて、それからまた往来の上を人通りがないのでいい氣になつて走ります。僕も帽子の走るとおりを、右に行つたり左に行つたりしながら追いかけました。夜のことからそこいらは氣味の悪いほど暗いだけでも、帽子だけははつきりとしていて、^{きしよう}徽章までちゃんと見えていました。それなのに帽子はどうしてもつかまりません。始めの中は面白くも思いましたが、その中に^{くや}口惜しくなり、腹が立ち、しまいには情けなくなつて、泣き出しそうになりました。それでも僕は我慢していました。そして、

「おおい、待つてくれえ」

と声を出してしまいました。人間の言葉が帽子にわかるはずはないとおもいながらも、声を出さずにはいられなくなつてしまつ

たのです。そうしたら、どうでしょう、帽子が——その時はもう学校の正門の所まで来ていましたが——急に立ちどまって、こつちを振り向いて、

「やあい、追いつかれるものなら、追いついて見ろ」

といいました。確かに帽子がそういったのです。それを聞くと、

僕は「何なに糞くそ」と敗まけない氣が出て、いきなりその帽子に飛びつこうとしましたら、帽子も僕も一緒になつて学校の正門の鉄の扉を何なんの苦もなくつき抜けていました。

あつと思うと僕は梅組の教室の中にいました。僕の組は松組なのに、どうして梅組にはいりこんだか分かりません。飯いい本もと先生が一錢銅貨せんどうかを一枚皆に見せていらつしやいました。

「これを何枚呑むとお腹なかの痛みがなおりますか」

とお聞きになりました。

「一枚呑むとなおります」

とすぐ答えたのはあばれ坊主の栗原くりはらです。先生が頭を振られました。

「二枚です」と今度はおとなしい伊藤いとうが手を挙げながらいいました。

「よろしい、その通り」

僕は伊藤はやはりよく出来るのだなと感心しました。

おや、僕の帽子はどうしたろうと、今まで先生の手にある銅貨にばかり気を取られていた僕は、不意に気がつく、大急ぎでそ

こちらを見廻わしました。どこで見失ったか、そこいらに帽子はいませんでした。

僕は慌^{あわ}てて教室を飛び出しました。広い野原に來ていました。

どっちを見ても短い草ばかり生えた広い野です。真^ま暗^{くら}に曇った空に僕の帽子が黒い月のように高くぶら下がっています。とても手も何も届きはしません。飛行機に乗って追いかけてもそこまでは行^ゆけそうにありません。僕は声も出なくなつて恨^{うら}めしくそれを見つめながら地^じだんだを踏むばかりでした。けれどもいくら地だんだを踏んで睨^{にら}みつけても、帽子の方は平氣な顔をして、そつぽを向いているばかりです。こつちから何かいいかけても返事もしてやらないぞというような意^い地^じ悪^{わる}な顔をしています。おとうさん

に、帽子が逃げ出して天に登って真黒まっくろなお月様になりましたと
いったところが、とても信じて下さりそうはありませんし、明日あす
からは、帽子なしで学校にも通かよわなければならぬのです。こん
な馬鹿げたことがあるものでしょうか。あれほど大事に可愛がつ
てやっていたのに、帽子はどうして僕をこんなに困らせなければ
いられないのでしょうか。僕はなおなお口惜しくなりました。そう
したら、また涙という厄介やくかいものが両方の眼からぽたぽたと流れ出
して来ました。

野原はだんだん暗くなつて行きます。どちらを見ても人つ子一
人いませんし、人の家うちらしい灯ひの光も見えません。どういう風ふうに
して家に帰れるのか、それさえ分らなくなつてしまいました。今

までそれは考えてはいないことでした。ひよつとしたら狸たぬきが帽子に化けて僕をいじめるのではないかしら。狸が化けるなんて、大うそだと思っていたのですが、その時ばかりはどうもそうらしい気がしてしかたがなくなりはじめました。帽子を売っていた東京の店が狸の巣で、おとうさんがばかされていたんだ。狸が僕を山の中に連れこんで行くために第一におとうさんをばかしたんだ。そういえばあの帽子はあんまり僕の氣にいるように出来ていました。僕はだんだん氣味が悪くなってそつと帽子を見上げて見ました。そうしたら真ま黒くろなお月様のような帽子が小さく丸まった狸のようなも見えました。そうかと思うとやはり僕の大事な帽子でした。

その時遠くの方で僕の名前を呼ぶ声が聞こえはじめました。泣くような声もしました。いよいよ狸の親方が来たのかなと思うと、僕は恐ろしさに脊骨がぎゅつと縮み上がりました。

ふと僕の目の前に僕のおとうさんとおかあさんとが寝衣ねまぎのまま、眼を泣きはらしながら、大騒ぎをして僕の名を呼びながら探しものをしていらつしやいます。それを見ると僕は悲しさと嬉うれしさとが一緒にあって、いきなり飛びつこうとしましたが、やはりおとうさんもおかあさんも狸の化けたのではないかと、ふと気が付くと、何んだか薄気味が悪くなって飛びつくのをやめました。そしてよく二人を見ていました。

おとうさんもおかあさんも僕がついそばにいるのに少しも気が

つかないらしく、おかあさんは僕の名を呼びつづけながら、たんす筆筒の引出しを一生懸命に尋ねていらつしやるし、たずおとうさんは涙で曇る眼鏡を拭きながら、本棚の本を片端から取り出して見ていらつしやいます。そうです、そこには家にある通りの本棚と筆筒とが来ていたのです。僕はいくらそんな所を探したって僕はいるものかと思ひながら、しばら暫くは見つけられないのをいい事にして黙つて見ていました。

「どうもあれがこの本の中にいないはずはないのだがな」

とやがておとうさんがおかあさんにおつしゃ仰有います。

「いいえそんな所にはいません。またこの筆筒の引出しに隠れたなりで、いつの間にか寝込んだに違いありません。月の光が暗い

のでちつとも見つかりはしない」

とおかあさんはいらいらするように泣きながらおとうさんに返事をしています。

やはりそれは本当のおとうさんとおかあさんでした。それに違
いありませんでした。あんなに僕のことを思ってくれるおとうさ
んやおかあさんが外ほかにあるはずはないのですもの。僕は急に勇気
が出て来て 顔かお 中おじゅう がにこにこ笑いになりかけて来ました。「わ
っ」といって二人を驚おどろかして上げようと思って、いきなり大きな
声を出して二人の方に走り寄りました。ところがどうしたこと
でしょう。僕の体は学校の鉄の扉を何の苦もなく通りぬけたように、
おとうさんとおかあさんとを空気のように通りぬけてしまいまし

た。僕は驚いて振り返って見ました。おとうさんとおかあさんとは、そんなことがあつたのは少しも知らないように相変らず本棚と筆筒とをいじくっていらつしやいました。僕はもう一度二人の方に進み寄って、二人に手をかけて見ました。そうしたら、二人ばかりではなく、本棚までも筆筒まで空気と同じように触ることが出来ません。それを知ってか知らないでか、二人は前の通り一生懸命に、泣きながら、しきりと僕の名を呼んで僕を探していらつしやいます。僕も声を立てました。だんだん大きく声を立てました。

「おとうさん、おかあさん、僕ここにいますよ。おとうさん、おかあさん」

けれども駄目でした。おとうさんもおかあさんも、僕のそこにいることは少しも気付かないで、夢中になって僕のいもしない所を探していらつしやるんです。僕は情けなくなつて本当においおい声を出して泣いてやろうかと思う位でした。

そうしたら、僕の心にえらい智慧^{ちえ}が湧^わいて来ました。あの狸帽子が天の所でいたずらをしているので、おとうさんやおかあさんは僕のいるのがお分かりにならないんだ。そうだ、あの帽子に化けている狸おやじを征伐するより外^{ほか}はない。そう思いました。で、僕は空中にぶら下がっている帽子を眼がけて飛びついて、それをいじめて白状させてやろうと思いました。僕は高飛びの身構えをしました。

「レデー・オン・ゼ・マーク……ゲッセツト……ゴー」

力一杯跳ね上がったと思うと、僕の体はどこまでもどこまでも上の方へと登って行きます。面白いように登って行きます。とうとう帽子の所に来ました。僕は力みかえって帽子をうんと掴つかみました。帽子が「痛い」といいました。その拍子に帽子が天の釘くぎから外れでもしたのか僕は帽子を掴んだまま、まっさかさまに下の方へと落ちはじめました。どこまでもどこまでも。もう草原くさはらに足がつきそうだと思うのに、そんなこともなく、際限もなく落ちて行きました。だんだんそこいらが明るくなり、神鳴りかみなが鳴り、しまいには眼も明けていられないほど、まぶしい火の海の中にはいりこんで行こうとするのです。そこまで落ちたら焼け死ぬ外は

ありません。帽子が大きな声を立てて、

「助けてくれえ」

と呶鳴どなりました。僕は恐ろしくて唯ただうなりました。

僕は誰たれかに身をゆすぶられました。びっくらしして眼を開あいた
ら夢でした。

雨戸を半分開けかけたおかあさんが、僕のそばに来ていらつし
やいました。

「あなたどうかおしかえ、大変にうなされて……お寝ぼけさんね、
もう学校に行く時間が来ますよ」

と仰有おいました。そんなことはどうでもいい。僕はいきなり枕
もとを見ました。そうしたら僕はやはり後生ごしょう大事ひさしに庇ひのびかび

か光る二円八十銭の帽子を右手で握っていました。

僕は随分うれしくなって、それからここにことおかあさんの顔を見て笑いました。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年12月16日改版第1刷発行

底本の親本：「一房の葡萄」叢文閣

1922（大正11）年6月

入力：鈴木厚司

校正：石川友子

2000年4月29日公開

2005年11月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕の帽子のお話

有島武郎

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>